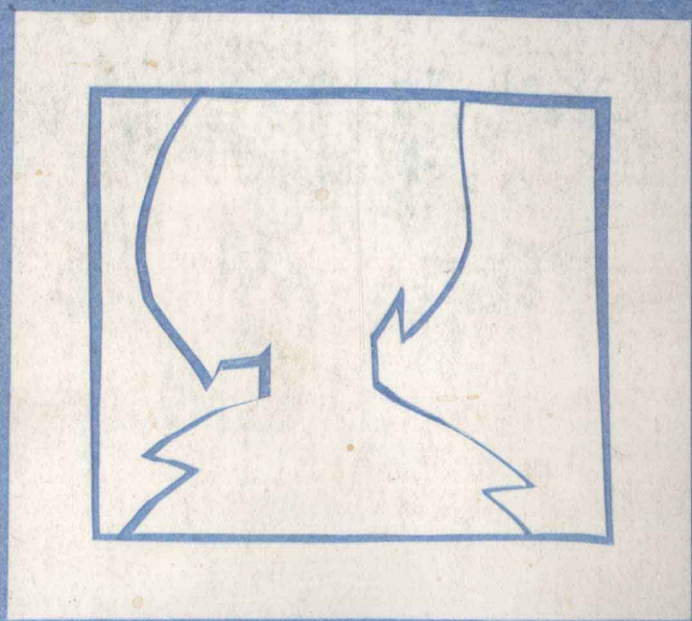
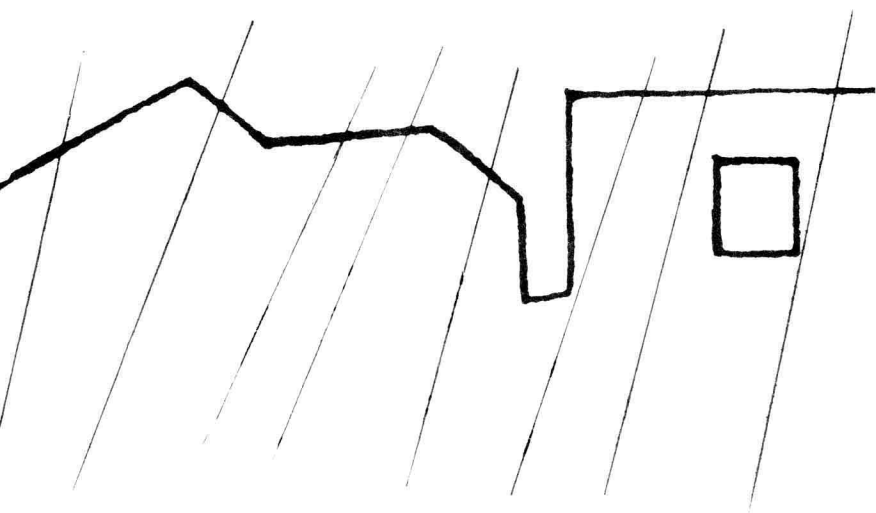


九月の空 高橋三千綱



高橋三千綱



九月の空

高橋三千綱（たかはしみちつな）

昭和二十三年大阪府豊中市生れ。

サンフランシスコ州立大学英语創作科、早稲田大学英语文科、中退。

昭和四十九年「退屈しのぎ」で群像新人賞受賞、昭和五十三年「九月の空」で第七十九回芥川賞を受賞。

著書に『退屈しのぎ』『彼の初恋』『怒れど犬』『グッドラック』がある。

昭和五十三年八月七日 初版発行
昭和五十三年九月八日 五版発行

著者 高橋三千綱

装幀者 大沢昌助

発行者 佐藤皓三

発行所 株式会社河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五

振替口座（東京）〇一〇八〇二

印刷 暁印刷

製本 小高製本

©1978 MICHITSUNA TAKAHASHI

定価はカバー・帯に表示してあります

目次

五月の傾斜	5
九月の空	75
二月の行方	149

九月の空

五月の傾斜

半年前、刃を振りかざして吹きつけてくる寒風に、首を縮めた。肩に力が入り、骨が軋む。

たまらずに背中を丸めると、耳が持っていかれ、顔だけ上げると鼻が削がれた。入学したいと思っていた高校を下見に行く途中でぶつかった十二月の風を見て、勇は芯から凍った軀の中央に、一本、確かな自覚を備えた緊張感が張りつめるのを感じた。両手をコートから抜いて背筋を伸ばした。氷の切っ先に似た風が喉を突いた。知らずに浮いた涙が震え、また知らずに凍えていった。首を下げると軀がぬるくなってしまうように思え、そうなることを勧めてくる誘惑に屈服する自分を恐れた。こわい風だった。そいつに息を吹きつけて歩いた。そして、針を飲み込む思いで存分に吸った。

三月前の風も辛辣なやつらだった。入試を受けに向う勇の正面から、体当りを食らわしてきた。固い風の壁を、押し戻す思いで歩き続けた。頬を殴りつけてくる透明な塊りに、生命を持

っているものの強い躍動感を覚えた。充分な手応えがあった。眼を見開き、胸を突き出した。歩いている自分がいた。

五月に入って、風は急に丸味を帯びてきた。一週間が過ぎた今では、夏の近づきを感じさせるほどに暖い。勇の喉をふやけた舌先で舐めて軀を後に旋回させ、ころころと転がっていく。微笑をたたえた風に肌を撫でつけられ、思わずいい気持だと呟いている自分に気付くと、勇は誰もいない早朝の戸を閉ざした商店街に佇み、一人で狼狽する。歩き出すほどに怒りと恥しさで胸が脹れ上がり、自分の姿がまるで、老後を春風に身をゆだねて楽しむ引退した小役人のように思えて、反吐が出る。陶酔したくなる甘い囁きの中でにやけていると、自分の姿が溶けてなくなる不安を抱く。強く射し始めた光の筋を、真っ二つに斬る瞬間を視線でとらえながら、勇は高校に向う。朝稽古が待っている。

勇が東京郊外の調布市にある高校に通い出して、ひと月になる。その間に、勇は古い木造の校舎と、無茶苦茶に臭い便所と、天井の高い、がっしりとした骨格を備えている旧式の体育館に馴染んできた。体育館の床を踏みしめるたびに、飛び散っていた様々の種類の神経たちが、脳天に集まってきて息を詰める。反応のない床の冷たさが快い。体育館には、高い所にある窓から光が斜めに射す。

合格を知ったその日に、勇は道場で知り合った鳴島に、高校の春季合宿に参加するように勧められた。鳴島は剣道部の主将だった。勇は合宿生活に必要な米と、いくばくかの金を工面し

て、見知らぬ先輩ばかりが肩を怒らせる合宿の中にとび込んだ。新入生では他に参加する者はなかった。六時に起きて、五キロの道程を走り、戻ってきて牛乳を飲む。その一口で軀が息を吹き返す。二百回の素振りとは掛り稽古のあとで朝食をとる。飯にみそ汁をぶっかけてかき込む。軀が脹れ上がり、毛穴から熱気が発散する。一時間近い柔軟体操のあとで休みのない掛り稽古がくり返される。勇は一年生になる予定の中途半端な新入部員の眼で見られる。稽古では常に痛めつけられ、先輩たちが受けに回って軀を休める間も、相手にとび込んで竹刀を振うことを命じられる。気が遠くなりそうになりながら、勇は軀ごとぶつかっていくことが最良だとされる、数少ない機会を逃すことなく突き進む。自分の影ばかり踏んづけようとする抑圧感が解放される。汗が眼に染み、相手の姿がぼやけると、自分の起こした風圧で視界を透明にさせる。

昼食後、二時間の休憩がある。先輩たちがバレー部の女子部員たちと談笑している間、勇は畳に大ノ字になって眠る。眠り込む前には、頭の中を剣道の様々の形が往来する。動いているのはいつでも勇の腕と竹刀だけだ。眼を覚ますと、掛り稽古と相稽古の組み合わせられた練習を三時間行なう。夕食後二百回の素振りをして、ミーティングに出る。そして、夜は柔道部の道場に綿のはみ出た湿気を多く含んだ蒲団を敷いて、先輩たちが肝をかき出す前に毛布を頭から被って眠る。

春の合宿は二週間続いた。勇は十日目に合宿から逃げた。江ノ島に行って海を眺めた。練習

の敵しさよりも、ほとんど名前を覚えていない先輩たちとの交際に疲れた。礼儀正しく接しろ、言葉遣いが乱暴すぎる、とことあるごとに文句をいわれた。勇は精一杯気を遣って先輩たちに接していたつもりだった。それでもまだ不満がる彼等に、嫌気を催した。清新な空気が必要だった。一人だけで今後は剣道に励んでもいいとさえ思った。混じり合っては、大切なものが破損されるような恐れを抱いた。

夜になって、勇は高校に戻った。観光客に揉まれて歩いているうちに、無性に防具をつけたときのひんやりとするときめきが恋しくなっていた。面を被る瞬間の圧縮された静けさを失ってしまふと、勇の視界が真昼の密林に迷い込んだような、焦燥感ばかりがつのる熱した暗闇に包まれてしまふ危惧を抱いた。勇の戻ってきた知らせを受けると、それまで勇に一言も口をきいてくれなかった日本史を教えている部長が、よかったなと呟いた。勇の胸は甘酸っぱいもので満たされた。

合宿が終ると、入学式になった。その日から、朝稽古が始められた。そこでも、一年生は勇だけだった。四月の中葉になって新入部員が入ってきて、稽古は賑った。鳴島はずらりと並んだ新入部員を見て満足し、練習量の減った勇は失望した。五月末の都大会めざして行なわれているはずの朝稽古に、肝心の三年生があまり姿を見せず、物足りなさも覚えた。竹刀を握るころが初めての者が多い新入部員相手の稽古に、勇はから回りをくり返して地中深く埋もれてしまふ自分を感じたりもした。二年生は四人しかいないため、掛り稽古では勇は受けに立たされ

ることが多くなった。初めは三十名近くいた新入部員も、近頃では十数名に減った。部員が減るたびに、勇の稽古量は増した。

幼稚園から短大まで備わっている女子校の前を通り、固く門を閉ざした寺を過ぎて、校門に着く。砂利の敷いてある内庭から昇降口を通じて、校庭の隅に、今にも崩れるようにして建っている壁の落ちた建物をめざして歩く。剣道部とハンドボール部の部室のほかに、そこには地学の教室がある。

六時を少し過ぎたばかりの空は、深い森を横切る溪流の水をすくったように高い所で透み渡っている。校庭は森閑としている。遠くの喬木林のあたりから鳥の囀りが響いてくる。土を踏む勇の足音が快い振動を肩に伝えてくる。

ドーを打つときの踏み込みが甘い、勇はそう思って歩いている。踏み込む刹那、心持ち竹刀を返す。出ゴテを警戒するためらいが一瞬胸をよぎる。それが相手の胴をとらえる前に柄でよけられたり、相討ちにされたりする結果を生む。中学二年生のとき、区の大会で勇は二段の者を相手にして戦った。意気込んで立ち上がるなりドーを取りにいったら、したたかに小手を打たれた。当時の手痛い記憶が勇の頭のどこかに根強く残っているらしく、現在でも一本先取るまではドー打ちには出ていくことができない。ときどき抜きドーを取って、相手の上体を虚空に泳がせたりもするが、その技はあくまでも気分転換のものだと勇は思っている。勇は中学時代から、ほとんどメン一本槍で押し通してきている。自分の技に幅がないのを勇は知ってい

る。三年生のなかには突きで勇を攻めたててくる人もいるが、それならそれで相手の突きが喉に入る前に、頭を叩き割ってやろうという気持が働く。練習するたびに、つらい、と勇は思う。そう思うが、竹刀を捨てる気はしない。それは自分に負けたくないという克己の気持からきているのではなく、ただ単に、竹刀を構えていると自分がそこに佇んでいるのを見つめていられるという、自分の全身を四方で鏡に囲まれた中央に納めて、全然別の自分がそれを無表情に眺めているような錯覚に魅かれるせいだ。打ち合っているときでさえ、勇の脳裏に泥水のようなとりとめのない思考や、あるいは幼い冬の日に、腐りかけた塀に寄りかかって仰いだ青空に漂う筋雲の眩しい情景が、閃き合って浮かび上がってくる。そうするといわずに騒いでいた勇の血が静まり返り、かえって相手の姿がまるで凝結した氷細工のようによく見ることができる。

稽古をする前の勇の頭の中は、空白になっている。同級生や先輩たちの生まの言葉に相槌を打っているだけのような自分を見ることがさえある。その会話のあい間に、ときおり勇は自分の使っている三尺八分の竹刀が、素早い動きで部員の頭や腹を叩きつけている情景を見る。剣道は面白い、と勇は思う。

古い建物に足を踏み入れる。床が鳴り、硝子の入っていない窓からなまった風が入ってくる。勇は肩を回す。遅刻の心配をせずにここに来るのは久しぶりだと思う。半分朽ちかけている部室のドアを開けると、金村がパンツ一枚の姿で、屈伸運動をしていた。勇を見上げて頬を

崩し、情ない顔で笑った。

「首も足も、からだ中痛くないところなんてないよ」

「おれもだ」

勇は鞆を置いて、壁にかけてある自分の剣道衣を手を取った。金村は中学時代に相当鳴らした剣士で、一年生の中では勇の唯一のライバルだった。彼を強いと思うし、もっともとうまくなるやつだと勇は思う。新入部員のだれが部をやめていったところで気にならないが、金村がそうなれば勇は大きな張合いをなくす。金村は剣道にかぶれているところがあって、勇は好きなのだ。

「今朝糞をしていてさ、紙でケツを拭こうにも腕が曲がんないんだよ。で、手を抜いて途中で拭くのをやめたんだが、立ち上がりにもだめなんだ。仕方がないからまた坐って、きれいに拭いちゃったよ」

金村はパンツの中に手を入れて、お尻をなでながらいう。勇は学生服を脱いでいる。

「水洗便所にすればいいさ」

「金がかかるよ」

「貧乏人はいやだな」と勇はいう。

「おまえんどこは？」

「おれんちもトルコ式だけだな」

「おれの親父は朝鮮人だからな、水洗なんでものに頭が回らないんだ」

「文化水準が低いんだ」

「そうなのよ。もっとも、金がないのも事実なんだけどさ」

二人は声を合わせて笑った。

「しかし、こう毎日練習ばっかしじゃ筋肉が休まるひまがないよな」

金村はパンツのゴムを引っぱったり放したりしながら中に風を送り込んでいる。稽古衣の匂いが軀に浸み込んでしまっているのだ。勇はそうだなと返事をして、ズボンを脱ぎ、壁の釘にひっかける。

「小林はタフだから何ともないだろうけどよ、おれはもう限界だよ、店の手伝いもしなくちゃなんないし」

「おれはタフじゃないよ、血統的に弱いらしいんだな。親父も病弱だし、じいさんも疣痔で苦しんでいたからな」

「おれの親父なんか疲れっぱなしよ。たいした仕事してないのにさ。昨夜だってお袋にあんた今日は早いねっていわれて、うん、疲れているんだというなり肝かいて寝ちまったよ。妹はゲラすか笑って、蒲団の中で涙流してやんの、おれさみしかったよ、親父があれじゃ、練習がこたえるのはもっともだもんな」

「親の因果が子に報いか、ちょっと違うかな」